

八十歳の新生活

鈴木 時子 神奈川県相模原市 八十歳

八十歳を目の前にして五十年暮らした家を売った。猫の額ほどの庭があった。沢山の草花やハーブ、木を植え子育て中は、きゅうり、ナスにトマトと野菜を作り実のなる様子を子供に見せて、毎朝収穫し食べて楽しんだ。夫が逝って子供が独立して私は独居老人になった。駐車場をハーブで埋め、小さな「ターサ・チューダの庭」なんて自己満足していた。ご近所も楽しんでくれた。おんぶバツタにカマキリと虫も集まっていた。その子たちと古くなった家を置いて終の棲家を探した。迷った結果、高齢者用賃貸住宅にしたが、初めての集合住宅暮らし。夫は空の上で怒っていないか、慣れない生活に、これで良かったのか、見えるものは窓、同じ窓ばかり。八十歳になった。不安と迷いの毎日。目の前に緑が欲しい。

ある寒い朝、ベランダに持ってきた少しばかりの鉢植の脇からスマイレが咲いた。凜とした美しさ。誇りさえ感じた。弱気な私の心がドツキとした。そして癒された。

「スマイレちゃん、ここが気に入ってくれたのね。ここがいいのね」それから次々と咲き、その後、あっちの鉢の脇から、こっちのプランターから桜草が満開に咲いた。みんなついてきてくれたんだ！そしてここが気に入ってくれたようだ。私の気持も決まった。

「ここがいい。ここがいい！」良く見ると、緑の多い団地。団地の中には桜並木がある。ベンチも並んでいる。何を迷っていたのか、春には野菜を植えてみよう。